

[シンポジウム]

家族看護学への取り組み

司会のことば

東京大学

杉下知子

愛知県立看護大学

小宮久子

日本家族看護学会学術集会は今回第三回を迎える。第一回のシンポジウムは「家族看護学の現状と展望」、第二回のシンポジウムは「家族を継続的に支える看護の役割—各領域の実践から—」と題して行われた。今回はこれらの経過をふまえ、「家族看護学への取り組み」と題してシンポジウムを企画した。わが国において展開されてきた妊産婦・乳幼児へのケアや精神障害者・心身障害者へのケアなどの活動は家族看護学の領域そのものであったと考えられるが、患者とその家族を対象とした一つの独立した学問領域としての家族看護学への取り組みは今まさに始まったばかりである。シンポジストは大学教育の場で活躍中の先生方であり「看護学教育の中での家族看護学への取り組み」を中心として話題を提供していただくことにした。現在ご所属の大学でのご経験はもちろんのことその他のご経験もご紹介いただき、フロアからも活発な討論をいただいた。各演者の内容の概略は次のようであった。

すなわち、井上 郁先生は“家族看護学”の根幹である“家族”とは何だろうか、あるいは家族を一つのユニットとして捉えるとはどういうことかという問題提起をしていただいた。原 礼子先生は大学での現行教育カリキュラムの中で家族看護学に関連した科目および学生の“家族”の理解の程度を述べたあと、他領域と家族看護学との関連を図に示し力

リキュラム私案を提示下さった。石垣和子先生は、東京大学家族看護学教室で学部3年生の授業科目「家族看護学(2単位)」を担当している立場から講義枠組みの基本的理念および家族病理を出発点とした立場で構成した内容を述べられ、今後の課題にもふれていただいた。

次の2題は家族看護の実践活動報告であった。森山美智子先生は山口県立中央病院看護部との共同で「カルガリー家族看護モデル」を入院患者を対象に実践の場に導入し、その準備段階から臨床展開例まで詳しくご紹介いただき、その有効性を報告された。渡辺裕子先生は千葉大学千葉銀行寄付講座家族看護学講座の活動の一つとして臨床看護婦(士)とともに活動する中で、家族の変化する過程を臨床看護婦(士)が理解し、彼らの看護観が変化していった過程を紹介下さった。

フロアからの質疑および演者間の討論の中で、家族そのものが病理をもつと考えるのか家族はもともと健全なヘルスケアの役割を持ちうるものかと考えるかが論点となった。鈴木和子会長の「いずれも家族を全体として捉らえることの意義をもつ視点であるので、家族看護学の枠組みの中で討論できるものと考えられる」との発言で全体が締めくくられた。今後も学会の場を通じて情報交換を行い、家族看護学の発展の方向を討議していきたい。